



山田浩之教授

専門：開発経済学

応用ミクロ計量経済学

(インタビュアー：名和)

「途上国や新興国が抱える問題を経済学的視点で研究しています」

Q.先生の専門とされている分野は何ですか？

開発経済学を専門としています。開発経済学とは、途上国や新興国の経済問題やその他の問題を経済学的にアプローチする学問です。しかし、開発経済学では様々な分野の問題について取り組むため、分析ではミクロ経済学、マクロ経済学、計量経済学を土台として、政治経済、医療、公衆衛生、労働、農業、貿易、行動経済など幅広く取り入れており、学習するのが結構大変です。そして、トピックが具体的に定まっていないからこそ、深く勉強するのもまた大変なのです。そのため、ゼミではデータ分析の基礎を学ぶのはもちろんのこと、どのようなトピックが重要かを考え、そのトピックに合わせて必要な知識を身につけることを行っています。また、私自身の研究は東南アジアやアフリカが主です。最近の研究では、ベトナムにおける共産党リーダーの出身地と企業の分布の関係を分析しています。田舎から党のリーダーが出た場合、企業がその地域に進出するのか、または地域が企業を誘致できるのかについて研究をしています。また、ベトナムにおける公的医療保険の拡大とその影響といったトピックも扱っています。直接研究とは繋がらないかもしれませんが、アフリカ進出を目指す中小企業さんとの共同活動も行っています。

「貧しい国のことを考え、そうした国のために働きたいと思った」

Q.なぜ開発経済学に興味をお持ちになられたのですか？

最初のきっかけは中学生の時に貧しい国のことを考え、そういう国のために働きたいと思ったことです。その中で国際公務員に目が留まりました。実家が商売をしていた関係で経済やモノの流れを俯瞰的に見たいと思い経済学部へ進学し、経済分野の国際公務員を目指そうと思いました。国際公務員になるには修士号や博士号を持っているほうが良いので、入学後はとりあえず博士号取得を目指して頑張りました。しかし、旅行程度でしか発展途上国に行ったことがなく、このまま大学院に進学して勉強しても現地で何が起きていて、どういうことが問題になっているのかイメージが湧きづらく、自分の中では納得いきませんでした。そのため、大学院を休学して2年間青年海外協力隊としてザンビアで理数科教師として働きました。こうした経験を経て開発経済学の道に進んでいきました。

「開発経済学がやるべきことはまだまだ沢山ある」

Q.開発経済学の進歩や各国の支援は途上国・新興国の発展にどれほど寄与していますか？

2015年に初めて世界の極貧人口が総人口の10%未満になるなど、開発経済学の進歩や各国の支援等による経済発展・成長により貧困の改善はかなり進んでいると思います。極度の貧困下にいる人々は減っているものの、依然として貧困にあえいでいる人々は多くおり、開発経済学がやるべきことはまだまだ残されています。しかも国によって制度や状況が異なることからアプローチの仕方も当然変わってきます。つまり、各国個別の分析が必要となるため、開発経済学がやるべきことは本当に山積みなのです。

「世界の潮流を学び、多角的な視点で日本を見ることが出来る」

Q.グローバル化が進む中で、今開発経済学を学ぶことにどのような意義がありますか？

実は途上国の方が日本より進んでいる点があったりもするんです。例えば、ケニアでは携帯電話で操作可能な電子マネーのムペサが大衆化しており、出稼ぎ労働者がムペサを通じて収入を田舎の家族に送金したりしています。一方、ルワンダはIT立国を目指して企業誘致や起業を積極的に進めています。しかし、その陰では貧困問題も根強く残っており、途上国・新興国は動きが非常にダイナミックなのです。そういうことを大掴みして学んでいくことは、世界の潮流を学ぶという意味で非常に良いことだと思います。もちろんずっと日本について勉強することも素晴らしいことですが、逆に世界のそうした流れを知った上で違う角度から日本について見ると、新たに学べることはあると思います。また、開発経済学は突き詰めていくと経済発展論であり、そういう考え方は実は先進国にとっても重要なのです。先進国の在り方を考えることにも繋がるという意味で非常に重要な分野だと思います。

「ゼミに思い入れがあり、そこでの日々や仲間は貴重なものだった」

Q.先生はどのような学生時代を過ごしていましたか？

極めて普通の学生だったのですが、しいて言うならばゼミに非常に思い入れがありました。ゼミは先生が税制から沖縄の基地問題まで幅広い分野を扱っているところに所属していました。ゼミではよく勉強し、よくケンカし、よく飲んでいました（笑）。今でも世界各地に散らばる仲間と交流を続けており、当時の話に花を咲かせています。振り返るとやはりゼミで費やした時間は貴重なものだったと思います。こうした経験から自分のゼミの学生には「ゼミの仲間は一生ものだ」とよく言っています！

「様々な物事に対し、自分で考えて決断する力を養ってほしい」

Q.先生の教育理念をお聞かせください！

学生が自分で考えて自ら決断することを大事にしています。人にアドバイスをもらったり参考にしたりするのはいいのですが、他人の意見を物事の判断基準にするのではなく、そうした意見を消化した上で自分なりに考えて決断する力を学生にはつけてほしいと思っています。

「ゼミでの活動を通じて分析能力、説得力、度胸を徹底的に鍛える」

Q.ゼミではどのような活動をしていますか？

山田ゼミでは夏休みにゼミ合宿として東南アジアやアフリカに行くことがありますが、合宿は毎年必ずやるというわけではなく、実施する場合は3年生が主体となって行先等を決めています。今年のゼミ合宿はアフリカのルワンダへ行きました。ルワンダはアフリカの中では比較的安全であり、社会的にもかなり進んだ国です。今の話だとゼミの活動としてゼミ合宿が前面に出ているように見えますが、山田ゼミの売りはそこではないのです。山田ゼミの売りは学生がゼミでの活動を通じて分析能力、説得力、度胸、そして+αを身につけることが可能な点です。自身の経験を踏まえた上で学生にとって重要だと思う能力は、分析能力、機動力、説得力、信頼関係の構築、度胸の5つです。分析能力はゼミの輪読や座学を通じて身につけることができ、説得力はゼミ内でチームに分かれて行うディベートを通じて論理的思考力を鍛えることで身につけることが可能です。度胸は学生が発案したNGO団体へのインタビューがその一例です。この企画は学生たちが主体となって今年から始めたものであり、自分たちでプロジェクトを一から作り上げるにはかなりの度胸が必要ですが、学生たちはそれを自力でこなすことで自然と度胸を身につけています。このように5つ挙げた能力の内3つに関してはゼミでカバーしているつもりです。そこから+αで何かの能力を養う場を提供できればと思っています。

「やる気、積極性、ゼミへの貢献意識があり、それらが持続する学生」

Q.山田浩之研究会を志望する2年生に求めるものは何ですか？

当研究会ではやる気や積極性があり、ゼミに貢献したいという気持ちが強く、なおかつそれらを長期的に持続できる学生を求めています。4月から始まるゼミの活動は徐々に負荷がかかっていくため、最初はやる気があってもモチベーションが持続しない人には厳しいです。だからゼミをずっと頑張れる人に来てほしいですね。また、ゼミは少人数で学べる限られた機会であり、山田ゼミでは3年生を10名ほどしか取らないので、私も本気で取り組んでいます。そのため、とにかくやる気のある学生に来てほしいです。そして、少人数で深い関係を築くことで、ゼミ生の考え方や性格、恋愛事情まで把握しています（笑）。過去の活動や勉強内容などはあまり関係がなく、それよりも気持ちの問題が重要です。

「自分のことは自分で決められる人間になってほしい」

Q.最後に2年生にメッセージをください！

学部生の時はやりたいことが多々あると思いますが、資格や年齢の関係上制約があり、なかなかやりたいことができない場合もあると思います。現実と理想のギャップによって生まれる葛藤を逆にエネルギーに変えて日々頑張り飛躍してほしいです。また、最終的には自分のことは自分で決めることができる人間になってほしいです。人生において岐路に立つことは何度もあり、その都度自分で考えて決断し、進むことが重要です。ゼミ選びもその一つだと思います。

【編集後記】

山田先生は、質問が多岐にわたる長時間のインタビューにおいても常に真摯に答えて下さった。また、ご自身の研究内容に関しても非常に丁寧で分かりやすいご説明をしてくださったので、研究内容について理解を深めることができた。昨年アメリカの国連本部を見学し、開発経済学に少しばかり興味を抱いていた筆者は、もう一度ゼミ選びの機会があるなら今度は是非山田ゼミに入りたいと思った。そして、筆者にそう思わせてくれる素晴らしい教授である事が読者に伝われば幸いである。

山田先生、この度はお忙しい中インタビューにお時間を使っただき、本当にありがとうございました。

文責：名和真也